

自己意識と客観性

滝沢 正之

0 はじめに

本稿は、二つの哲学的な問題を扱うものである。一つめは、自我とはいかなるものか、という問題であり、二つめは、世界に一定の客観的な秩序がある、ということが、いかなる仕方で根拠づけられるのか、という問題である。この二つは、一見、別の問題のように思われる。しかし、連関させることにより、両者について一定の見通しが得られるのである。

このような試みは、我々がここで初めて行うものではない。これは、イマヌエル・カントImmanuel Kantが『純粋理性批判 Kritik der reinen Vernunft』において、超越論的演繹なる論証を展開する際に採用した戦略である。すなわち、本稿は、カントの超越論的演繹を解釈しつつ、考察を進めるものである。

さて、周知のように、『純粋理性批判』は異なる二つの版をもち、それぞれの超越論的演繹は大きく異なっている。我々は、1787年出版の第二版における超越論的演繹のみを扱うこととする。以下、とくに断りがない場合、「超越論的演繹」ということで、第二版のもののみを指示する。また、第二版の超越論的演繹は、形式上からも内容上からも二つに区別しうる論証構成になっている。本稿では、紙幅の都合上、その前半部分を中心に扱うことになる。超越論的演繹の前半部からのみでも、上述の問いに対する

有効な議論を読み取ることが可能なのである。

1 問題提起

(1) 超越論的演繹とは何か

テキストの検討に先立って、超越論的演繹について概括しておきたい。

超越論的演繹のそもそもの課題は、先立つ形而上学的演繹において示された諸カテゴリーの客観的妥当性の証示にある。さらに遡るならば、この課題は、ア・プリオリな総合判断の可能性を示す、という『純粹理性批判』全体の課題から由来するものである。

ここで我々は、議論を簡潔にするため、ア・プリオリな総合判断の可能性、ということ、世界に一定の秩序ないしは構造が客観的に存在する可能性、と読み替えることとする。すなわち我々は、超越論的演繹とは、世界に一定の秩序が客観的に存在する、ということを示す論証である、と解する。世界は混沌ではない。世界には秩序が存する。また、その秩序は、たんに我々の思念のうちにのみ存するような主観的なものではない。世界の側に成立している客観的なものなのである。

この観点から整理すると、超越論的演繹は、以下の二つの論証の結合から構成されることになる。すなわち、第一に、世界に一定の秩序が客観的に存在する、という論証であり、第二に、その秩序が、カテゴリーによってのみ成立する、という論証である。本稿では、前者のみを扱い、後者は検討の範囲から除外する。

ところで、この客観的な秩序が具体的にいかなるものか、ということは、続く超越論的原則論で詳述される。そこでは、カテゴリーのそれぞれについて、原則が提示されている。一方、超越論的演繹においては、この秩序がどのようなものであるか、ということではなく、そもそも何か秩序が存在するのか否か、ということのみが扱われている。すなわち、諸カテゴリー

一の差異には言及せず、カテゴリー全般の客観的妥当性が論じられているのである。したがって、我々も、秩序が客観的に存在するかどうかのみを考察する。

(2) 超越論的演繹の問題点

続いて、我々の解釈の軸となる論点について述べておく。

先に確認した超越論的演繹の課題は、冒頭に示した我々の扱うべき問題の二番目に当たる。この問題を、カントは自我に言及することにより解決しようと試みている。これをもって、一番目の問題と二番目の問題が交錯することになる。

しかし、カントによるこの解決方法の展開のあり方に疑問を抱く解釈者たちが存する。もっとも判りやすい論者として、『意味の限界』におけるストローソンを挙げることができよう^{*1}。ストローソンは、カントが総合の理論を採用することにより、件の問題を解決している、と解する。総合の理論とは、端的に言うならば、心が世界ないしは自然を創っている、というものであるとされている。秩序の問題に引きつけるならば、心が一定の仕方では世界を創るがゆえに、世界には一定の秩序がある、というものである。ところが、ストローソンによれば、このような総合の理論は、端的に誤りである。そこで、ストローソンはカントの論証の大幅な再構成を試みることになる。

以上のようなストローソンのカント評価には、汲むべき点がある。第一に、超越論的演繹に、先の意味での総合の理論が組み込まれていることは否定できない。第二に、総合の理論が、我々の心に理解し難い能力を付与する、悪しき形而上学的主張であるように思われることも確かである。我々もまた、これらの点から出発する。しかし、にもかかわらず、ストローソンの再構成的なカント解釈そのものは、我々にとっては物足りないものである。それは、ストローソンが、客観的な秩序の問題の解決における

自我論の重要性を十全に把握しそこねているからである。我々は異なる道を探りつつ、カントの議論から有効な論点を抽出していくことになる。

以下、テキストを検討していく。

2 自己意識の構造

(1) 純粹統覚の導入

超越論的演繹の本格的な論証は、「統覚の根源的・総合的統一について」と題された第16節から開始される。第16節の冒頭は、よく知られた以下の一節である。

「私は考える」ということは、私のすべての表象に伴うことができなければならない。というのは、さもないと、まったく考えられることができないような何か、私のうちで表象される、ということになってしまうが、このことは、この表象が不可能である、ということ、または、少なくとも私にとっては無であるということと、同じことなのである。(B131 f.)^{*2}

超越論的演繹は、「私は考える」という自己意識の構造を明らかにする作業から開始される。ただし、もちろん、これで自我のすべてが尽くされているわけではない。自己意識という側面のみに限定した自我論の出発点が示されているだけである。しかし、もちろん、限定的であることは、その重要性とは背反しない。

さて、先の引用の主要な論点は、自己意識の随伴性と同一性、と整理することができる。

以下、これらの論点を順に確認していくが、それに先立って、議論の運びを明確にするための補助線を引いておく。ヒュームの『人性論』における自我論を概括しておくことにしたい。^{*3}

ヒュームの自我論の要点は、以下のようなものである。自我とは、完全な同一性および単純性を備えたものと思われている。しかし、我々は、完全な同一性や単純性を備えたものを知覚することはない。感情や感覚、身体のあるよう、どれを採っても、それは変化流動の相にある、ゆえに自我ではない。つまり、求められているような自我などは存在しないのである。

ここからヒュームは、自我とは変転する諸知覚の束である、という周知の結論を引き出す。このとき、自我の同一性および単純性は、束としての緩い統一へと還元されることになるだろう。

カントが自我論において採る戦略は、このヒュームの考察と対比することにより、明確になる。カントの基本的な方向は、完全な同一性や単純性をそなえた知覚表象が存在しないことを認めつつ、なお、完全に同一かつ単純な自我を確保していく、というものである。

(2) 随伴するものとしての「私」

自我は、「私は考える」という自己意識において成立する。これが出発点である。カントは、この自己意識を純粹統覚ないしは根源的統覚と呼ぶ。純粹統覚のありようを確認せねばならない。

第一に指摘すべきは、「私は考える」という自己意識は、別の何かある表象に伴うことにおいて成立する、という点である。純粹統覚がそれだけで成立する局面はない。あくまで、それとは別の表象に伴う、ということにおいて、純粹統覚は存在する。自我は自我でない表象の存在を必要とするのだ。

純粹統覚は、「私」の表象の存在を前提し、これに随伴することにおいて成立する。この主張は、以下のように解釈できる。様々な存在者が表象する能力をもつだろう。しかし表象をもっている、というだけでは、自我がある、ということにはならない。犬や猫でさえ、何か表象している。外界の刺激に反応するがゆえに、アメーバやプラナリアでさえ何か表象して

いるかもしれない^{*4}。しかし、犬や猫、アメーバに自我はない。これらは、表象をもつが、自らの表象を他ならぬ「私」の表象である、と考えることはないのである。

では、何が足りないのか。所与の表象が「私」の表象である、と理解するためには、まずもって、自らのもつあらゆる表象について、「私は考える」という自己意識が随伴する可能性があること、これを理解しなければならぬ。なにかある表象について、「私は考える」という自己意識を伴わせたとき、すなわち、「そのかくかくの表象を私は考える」という把握を行えたとき、はじめて、その表象は「私」の表象となる。ここで初めて自我が成立することになる。

「私は考える」という自己意識の随伴により、「私」の表象を「私」の表象として把握する、ということにおいて、自我ははじめて成立する。これを、自我なるものがまずあって、それが自らを反省する、という図式で考えてはならない。随伴することに先立つ自我の存在を語ることに意味はない。自我は、上述のような事態の成立に、その一契機として組み込まれていなければならないのである。

このとき、なぜ自我は知覚できないのか、というヒューム的な疑問にひとまず回答が示される。純粹統覚は、知覚表象や感覚表象ではなく、それらに随伴するものである。そして、この純粹統覚において、自我は成立するのだ。しかし、これですべての問題が解決したわけではない。

(3) 同一なものとしての私

ここで、純粹統覚の特徴の第二点目を指摘しよう。それは、純粹統覚は、たんにある一つの表象について随伴するだけで成立するものではない、ということである。複数の表象が存在し、そのそれぞれについて、「私は考える」という自己意識が伴わねばならない。さらに、その自己意識は、すべての表象について、同一なものでなければならない。

まず、単一の表象に純粹統覚が伴うだけでは無意味であることを確認しよう。純粹統覚は、「私は考える」ということ以外の内容をもたない。その「私」がどのようなものなのかは、まったく規定されないのだ。ここから、ある「私」の一つの表象に「私は考える」という自己意識が伴う、と主張することになんの眼目もない、ということが帰結する。純粹統覚が付与されたとしても、その付与された表象になんらかの内容が付け加わるわけではない。「これはペンだ」を、「これはペンだと私は考える」と言い換えてみたところで、対象の規定という観点からすると、私についても世界についても何も増えてはいない^{*6}。この場合、純粹統覚はオッカムの剃刀に則って廃棄されるべきものとなる。

また、単一の表象に伴う場合のみならず、すべての表象を総括した全体に「私は考える」という自己意識が伴うことも、同様の論理に則って無意味である。ウイトゲンシュタインが指摘する、独我論と实在論が一致してしまう、という事態を想起されたい。このときも同様に眼目は失われる。

以上のような場合には、「私は考える」という自己意識を伴わせることはできるが、それになんら積極的な意味を見出すことができない。「私は考える」の「私」という概念が空回りしている、とも言えよう。これでは自我の存在をいくら言い立てても、悪しき形而上学的な主張にしかなりえないだろう。

ここで、数的同一性に着目すべきである。純粹統覚が意味をもつのは、それがなんらかの固有の機能を果たすことにおいてである。そして、それは、複数の表象に伴いつつ、同一性を保つ、という点に存する。ヒュームが指摘したように、知覚表象や感覚表象は変転し、同一性を保つものなどない。しかし、その個々の表象について伴いうる純粹統覚は、同一である。このとき、純粹統覚が伴うことにより、多様な表象が、すべて私に属する、という観点から、他ならぬ「私」の表象として一つの集合へと取り纏められることになる。純粹統覚は、多様な表象を取りまとめる極として、眼目

をもつ。

カントはこれを、自己意識の統一、と呼ぶ。この表現には注意が必要である。カントの言は、自己意識なるものがまず存在し、それが与えられた多様な表象を統一する、という図式を思わせるものである。しかし、これは正しくない。多様な表象が取り纏められることを俟ってはじめて、純粹統覚は眼目をもつのだ。純粹統覚の成立と多様な表象の統一とは相即的な事態である、と捉えねばならない。

さて、このとき、同一性の基準がまったく問題にならない点に注意しよう。「私は考える」があらゆる「私」の表象に伴うことができつつ、数的同一性を保つ、ということは、あらゆる経験に先立って了解されている。経験において同一な「私」なるものを見出す必要なしに、「私」の表象に伴う自己意識の同一性は了解されているのだ。これは、自己意識が「私は考える」以外の何らの規定ももたない、純粹かつ単純なものであることの裏返しである。^{*8}そして、このような事態は、「私」においてのみ成立し、「あなた」や「彼女」、「彼」には当てはまらない。「彼女」や「彼」がどのような存在者であるか、ということをして別にして、換言すれば、基準に言及せずに、「彼女」や「彼」の数的同一性を語ることはできないのである。これを、質的な同一性を視野に入れることなくして、数的同一性は論じえない、と考えることもできよう。一人称以外では、同一性の問いは人格の同一性という観点でしか成立することができない。そして、人格の同一性は、身体なり記憶なりといった、なんらかの規定を抜きにしては成立しえないのだ。他方、こと一人称に関するかぎり、基準抜きで数的同一性は確保される。自我の同一性は、人格の同一性とは異なる仕方で確保されるのである。我々は少なくともそのような直観をもっている。

(4) 小括

以上がまずもって確認しうる自己意識の構造である。

この構造は、自我が成立する最低限の必要条件を示していると考えられる。我々の各々が、「私は存在している」と考えるならば、それはすなわち上述の構造が成立していることを認めている、ということではなければならないのだ。別の表現を使うならば、以下ようになる。我々は日常的に「私」という概念を使っている。その概念の使用の可能性を基礎づけているのが、この自己意識の構造なのである。

もちろん、これが目的地ではない。ここから超越論的演繹が開始される、すなわち、客観的な秩序の存在が基礎づけられ、また、その過程で自我の把握も深化するのだ。その予想される論理は、以下のようなものだ。すなわち、上述の自己意識の構造が、なんらかの仕方で、世界における一定の秩序の存在を導くのである。

3 超越論的演繹の証明構造

(1) 自我から秩序へ

具体的な論証の検討に先立ち、いくつかの予備的考察を行う。まず、超越論的演繹の論証の基本的な発想を確認しておく。

自己意識の構造から出発し、客観的な秩序の存在を確保する、という論証は、明らかに一定の条件のもとでのみ有効なものである。すなわち、これまで論じてきたような自我が現実に存在していなければ、論証は成立しようもないのである。しかし、超越論的演繹において、自我の存在は前提されるが証明されることはない。もちろん、これは欠陥を意味しない。哲学的な論証において絶対的な基礎づけなど期待しようもない^{*9}。論証は、ある種の懐疑論論駁として解されるべきであろう。自我の存在を承認しつつ客観的な秩序の存在を否認するような主張を考えてみよう。これは、自我は確実に存在するが、世界のありようについてはなにも確たることは知りえない、というような懐疑論を導くであろう。このような主張との対決に

において、超越論的演繹は論証としての有効性をもつ。

ただし、この論点は指摘するのみに留める。というのは、我々の関心は客観的秩序の正当化論証の成否そのものにはないからだ。自我の存在と秩序の存在をさしあたり認めたくえて、その関係のありようから、それぞれの本質を見ていくこと、これが本稿の問題意識である。

(2) 超越論的統一の導入

問題を確認したい。既述のような構造をもつ自己意識が存在するとしよう。そのとき、世界に一定の秩序が成立している、ということが確保される。これが超越論的演繹に結論として期待されるものである。このような論証が成立するためには、自己意識と客観的な秩序との間にいかなる関係がなければならぬのだろうか。

これまでのカントの議論は、以下のように整理しうる。純粹統覚はあらゆる「私」の表象に伴いうる。そして、その際、自我は同一性を保つのであった。ここから、「私」の表象は、総じて純粹統覚に属する、すなわち、統一されることになる。

まずもって確認すべきは、カントが主張したいのは、次のようなことではない、という点である。「私」の表象がどんなに多様でそれぞれ没交渉なものであったとしても、それらは純粹統覚に属する、というただ一点において、統一されうる。換言すれば、「私」の表象がまったく秩序をもたない混沌であっても、もしくは、秩序をもつかどうかについての判断を完全に差し控えても、純粹統覚による統一^{*10}は成立する。これまでの自我論から、このようなことが読み取れるように思える。しかし、カントの主張したいことは、これではない。

自己意識と秩序の関係はどのようなものとなるのか。カントは純粹統覚の統一について以下のように述べる。

また、私はこの統覚の統一を自己意識の超越論的の統一とも名づけるが、それはこの統一からア・プリオリな認識が可能になる、ということを指摘するためである。(B132)

本稿ではア・プリオリな認識を客観的な秩序の存在と読み替える、ということは先に述べた。すると、一見、このカントの言は、上述の統一が秩序の必要条件になっている、というものに思える。しかしながら、必要条件では意味がないだろう。統一なくして秩序なし、ということは、統一あれど秩序なし、という場合を論理的に排除しない。これでは、秩序の存在を導出しえていない。実際、カントはここでもっと強い主張をしている。

カントは、先の引用にすぐ続けて、超越論的な統一について以下のように述べる。

というのは、もしも多様な表象が総じて一つの自己意識に属していないとすれば、ある直観において与えられているような多様な表象が総じて私の表象なのではない、ということになってしまうのである。すなわち、私の表象として（私がそれらをそのようなものとして意識していないとしても）それらの表象は、そのもとでのみそれらが一つの普遍的な自己意識のもとに共在しうるような条件に、まさに必然的に従っていなければならない。なぜならば、さもないと、それらの表象は汎通的に私に属さないからである。(B132)

この引用部において、カントは重要な一歩を踏み出している。それは、表象の自己意識への帰属条件への言及である。「私」の表象の自己意識による統一は、まったく無条件に成立しうるものではない。諸表象が自己意識に帰属するためには、何らかの条件が必要とされるのである。この条件への着目において、自己意識は、まさに超越論的な統覚と呼ばれるべき相で把握されることになる。

しかるに、先に確認したように、自己意識はそもそも表象を取り纏めることにおいて眼目をもつのであった。すなわち、この条件は、表象が自己意識に帰属するための条件であるだけではない。自我が自我として成立するための条件でもあるのだ。繰り返そう。表象の自己意識への帰属条件が自我の成立条件でもあるのだ。

そして、この帰属条件が、我々のもう一つの課題、世界における諸表象間の秩序の成立に他ならない。諸表象が一定の客観的な秩序のもとにあることが、自己意識への帰属の必要条件として要求されるのである。

(3) 総合する作用の位置づけ

表象の自己意識への帰属条件について、カントは以下のように述べる。

すなわち、直観において与えられた多様の統覚の汎通的な同一性は、諸表象の総合を含み、そして、この総合の意識をつうじてのみ可能である。(B133)

表象の総合こそが、問題の帰属条件であり、かつ、自我の成立条件ということになる。

さて、総合は、通常、総合という作用に力点を置いて理解される。総合とは、心が諸表象を結びつける、という働きである、というわけだ。そして、先に指摘したように、この図式を拒否する論者が存する。しかし、さしあたり論証のこの段階においては、総合の要点は作用にはないことに注意を喚起したい。とにかく表象が総合されてある、ということが重要なのであり、その総合された状態がどのように成立するのかということについては、さしあたり語る必要はない。すなわち、総合という作用は括弧に入れ、総合されたものが存在する、という結果のみに着目すればよい。

その理由は以下のとおりである。超越論的演繹の課題とは、自己意識の存在を前提にし、そこから客観的な秩序の存在を証示することであった。

これは、心は世界に秩序を必然的に創造する、ということを示すことによっても達成されるだろう。カントの総合の理論を字句どおりに解釈すれば、このようになる。しかし、このような主張をせずとも、端的に、秩序がないと自我はない、ということを示せば事足りるのではないか。これはすなわち、少なくとも自己意識が成立するためには、客観的な秩序が成立していなければならない、ということを示す、ということである。このとき、結果としての総合の存在のみに着目すればよいのであり、心が先行し秩序を総合して創る、という図式を思い浮かべる必要はない。もちろん、超越論的演繹全体の解釈において、このような総合の作用の排除が可能かどうか、は本稿の範囲を越える問題である。しかしながら、少なくとも我々の扱う範囲の解釈においては、以下、具体的に示すように、これは可能である。^{*11}

(4) 超越論的演繹の二段階証明について

超越論的演繹の論証構成を再度確認しておこう。

超越論的演繹は二段階構成になっている。その内実については、さまざまな研究がなされている。^{*12}しかし、我々は、この二段階構成の内実にはあまり深く立ち入らない。以下のように素朴に考えておきたい。本稿の冒頭で述べた我々の課題に対して、カントは前半と後半で二つの論証を用意している。二つの論証の差異であるが、自我論という観点からすると、以下のような特徴を読み取ることが可能である。すなわち、前半では自己意識と秩序、後半では自己認識と秩序との関係が扱われているのである。

我々はこれまで、自我について、自己意識という側面からのみ考察を行ってきた。しかし、自我の規定はそれのみでは尽きない。もうひとつの重要な契機として、自己認識という側面があるのだ。そして、これは狭義の自我論においてのみならず、客観的な秩序の存在の可能性、という問題との連関においても無視しえないのである。ただし、既に述べたように、

本稿は、自己意識と秩序の關係に考察の範圍を限定するものである。我々が語らずに置いたものがなにか、という点については、最後に確認することにした。

4 自己意識と秩序

(1) 課題の確認

諸表象が客観的な秩序のもとに置かれることが、それらの表象が自己意識に帰属するための必要条件となる。これが証示すべき結論である。まず、カントの論証を再構成しつつ、これを詳述していく。

まず手がかりになるのは、以下のカントの言である。これは、先に挙げた総合の契機の必要性を指摘する引用の直後に置かれている。

というのは、様々な表象に伴う経験的意識は、それだけではばらばらであり、主観の同一性との關係をもたないのである。この關係は、私がそれらの表象に意識を伴わせる、ということをつうじては、まだ成立しない、そうではなく、私が一つの表象を他の表象に付け加え、それらの総合を意識することをつうじて成立するのである。(B133)

ここから明らかなように、諸表象が混沌な状態では、それらの表象の各々に「私は考える」という自己意識を付与しえたとしても、この自己意識に同一性は成立しえないのである。同一性が成立するためには、諸表象は総合された状態になければならない。すなわち、秩序のもとに存しなければならない。その根拠として、カントは以下のことを挙げる。

さもなかったら私は、私の意識しているさまざまな表象に応じて、それだけ様々な「自己」をもつことになるのだろう。(B134)

言うまでもなく、これは背理である。秩序なくしては、自己意識の同一性が廃棄される。そのとき、自我は自我として成立しえなくなるのだ。

以上が、我々が証明すべき結論ということになる。カントはいかなる仕方ですべてこれを論証しているのだろうか。

(2) 自己意識と客観性

カントの言から、再度課題を確認しておこう。

さて、統覚の必然的統一というこの原則は、なるほど自己同一的であり、すなわち分析的命題であるが、しかしなお、この原則は、一つの直観において与えられた多様の綜合を必然的なものと述べる。この綜合なくしては、かの自己意識の汎通的な同一性は考えられえないのである。(B135)

「私は私である」ということは、たんなる同語反復のように思える。しかし、これまでに確認したように、自我が自我としての眼目をもつためには、随伴性と同一性という要件を満たさねばならないのであった。そして、カントの論点は非常に単純である。世界における秩序が途切れてしまったならば、要件たる「私」の同一性も途切れてしまうだろう、というものである。

これについての論証は、以下の線を引く例から読み取ることができる。

しかし、空間における何かあるもの、例えば一本の線を認識するためには、私はその線を引き、そしてまた、所与の多様の一定の結合を総合的に成立させねばならない。そして、この行為の統一は同時に（線という概念における）意識の統一であり、また、このことをつうじて初めてある客観（一定の空間）が認識されるのである。(B137f)

カントの強調点の置き方をそのままなぞるならば、この引用からは、「私」が線を引くことによって初めて線が成立する、という、総合の理論が読み取られるだろう。しかし、先に述べたように、我々の課題を解決するためには、心が必然的に秩序を創る、という図式を必ずしも採用せずともよいのであった。これを、我々のより単純な図式に読み替えるならば、以下のようになるだろう。すなわち、引いた線が一本になっている、ということがないと、「私」の行為が一個内の「私」の行為として統一されている、とは言えないのである。自己意識の同一性は、一本の線の成立に即してのみ、論じうるということになる。

これは、以下のように解釈できる。一本の線を引いた、と「私」は考える。これは、単純化すれば、「線を引き始めた」という表象と、「線を引き終わった」という表象のそれぞれに「私は考える」という自己意識が伴い、かつ、その「私」が同一である、ということを含意する。

ここで、想定してみたい。引いたと思っていたが、実際に線が引けていなかったとしたら、どう考えられるのだろうか。引き終わったと思ったにもかかわらず、鉛筆をもったまま白紙の前に座っている自分を見出したとしたら、どうなるのか。

ここでカントから読み取るべき洞察は、このとき、「線を引き始めた」という表象に伴う「私」と、「線を引き終わった」という表象に伴う「私」とが、同一である、ということとは言えない、というものである。これは、非常に素朴な直観に基づいている。線が引けていないのだから、線を引き始めた「私」などはどこにも存在しない。ならば、「線を引き始めた」表象に伴う「私」もどこにも存在しえないのである。存在しているのは、線を引き始めた夢を見ている「私」、もしくは、線を引き始めた幻覚を見ている「私」、線を引き始めたという記憶違いを起こしている「私」、云々であろう。夢や幻覚や誤った記憶のなかに存在する「私」の同一性

を語ることに意味はない。ゆえに、この場合、自我の同一性は、世界に引かれている一本の線という客観的な秩序のもとに複数の表象が置かれること、に基づいている。一般化するならば、こうなる。諸表象に随伴する自我の同一性は、それらの表象の秩序の成立に即して主張されねばならないのである。

カントが、一つの自我がまず存在し、それが多数の表象に対峙する、という図式を採用していない、ということ想起されたい。カントの図式は、多数の表象の各々に多数の自己意識が伴うが、その自我は同一である、というものである。すなわち、「私は考える」という自己意識は、表象に随伴することにおいて存在するのであった。この随伴の内実について考えねばならない。随伴する、とは、既に存在する自我が表象を意識することではない。その表象で示されている対象や出来事に「私」が実際に居合わせている、ということなのだ。それゆえに、「私」の表象は、一つの客観的世界に存するものとして、客観的な秩序のもとになければならないのである。

まとめよう。世界における客観的な秩序の存在と自己意識の同一性は相即的でなければならない。さて、同一性をなくして、自我の眼目はないのであった。こうなると、結論を導くことができる。すなわち、自我が存在する、と主張することは、秩序の存在を認めることを含意するのだ。このような関係のもとに、自我と客観的な秩序は立つのである。

5 おわりに

以上が、超越論的演繹の前半部分から読み取りうる、カントによる自我論および客観的な秩序の存在証明である。この論証はそれなりに完結している。しかし、注意すべき問題が一つ残されているので、これを指摘しておく。

結論において、世界における客観的な秩序の存在と自己意識の同一性は

相即的でなければならない、と述べた。こうなると、先に退けたウイトゲンシュタインによって指摘された問題が再提起されてしまうように思われるのである。すなわち、「私」が存在する、という独我論的な事態と、世界において客観的な秩序が存在する、という實在論的な事態は、一致してしまうのではないか。そうであれば、自我に言及する眼目は再び失われよう。言うなれば、これまでの議論だけでは、いまだ「私」は「私」たりえていないのだ。

本稿のカント解釈は、客観的秩序の存在証明という点では、たしかに一定の成果を挙げることができた。しかしながら、自我論としてはいまだ不完全なままに終わっているのである。

ここから、我々の今後の課題が明確になる。カントの超越論的演繹解釈としても、哲学的な自我論としても、我々は、超越論的演繹の後半部分における自己認識論を検討しなければならないのである。ただし、これについては別稿にて改めて論じることとしたい。

註

- * 1 Cf. Strawson, P. F., *The Bounds of Sense: An Essay on Kant's Critique of Pure Reason*, London: Methuen, 1966, pp.31-32. (熊谷直男、鈴木恒夫、横田栄一訳、『意味の限界』、勁草書房、1987年)。
- * 2 『純粹理性批判』からの引用は、慣例に従い第一版(1781年)をA、第二版(1787年)をBで示し、続けてその頁数を示す。
- * 3 Cf. Hume, D., *A Treatise of Human Nature*, edited by Selby-Bigge, L. A., 2nd edition by Nidditch, P. H., Oxford: Oxford University Press, 1978, pp.251-253.
- * 4 ライプニッツならば、どんな存在者であれ、モノダとして表象をもっている、と主張するだろう。ライプニッツとカントとの統覚概念の差異については、以下の論文を参照されたい。酒井潔、「経験的統覚と超越論的統

覚－ライブニッツからカントへ」、『京都女子大学人文論叢32』、1984年、pp.27-56。

- * 5 以上の議論を反省の図式ないしは想起の図式で考えてはならない。過去の「私」が行ったことを現在の「私」が想起する、という反省の図式は、ここに適用しえない。随伴することに先立って「私」など存在しないのだから。
- * 6 もう一つの道がある。現象学のように、ここから判断中止という論点を導入するものである。しかし、後に論じるように、カントはこれを採用しない。
- * 7 Cf. Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus*, London: Routledge and Kegan Paul, 1961, 5.64.
- * 8 しかしこの単純性を物象化してはならない、ということは、『純粹理性批判』「弁証論」における第二誤謬推理が教えるところである。(A351ff)
- * 9 絶対的な基礎づけの不可能性については、ミュンヒハウゼンのトリレンマ等を想起されたい。Cf. Albert, H., *Traktat über kritische Vernunft. Die Einheit der Gesellschaftswissenschaften*, Tübingen: Verlag Mohr (Siebeck), 1968, (萩原能久訳、『批判的理性論考』、御茶の水書房、1985年)。
- * 10 ここでカントと対立する見解として念頭に置いているのは、言うまでもなくデカルトとフッサールである。ただし、他の哲学説との比較研究は、本稿では具体的に展開しえなかった。
- * 11 総合の作用を導入したとしても、その内実については解釈の余地が多分に残る。総合の本性については、第一版の超越論的演繹に即してではあるが、以下の拙論で論じておいた。「三重の総合」の時間論』、『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集 2 1』、2002年。
- * 12 たとえば以下の文献を参照されたい。Henrich, D., “The Proof-Structure of Kant’ s Transcendental Deduction” , in *Review of Metaphysics* 22, 1969, pp.640-659.